

「あすチャレ!メッセンジャー」のスピーチトレーニングをサポートしパラアスリートの人生設計を支援

世界的な総合コンサルティングファームであるアクセントゥア株式会社。同社では企業市民活動の一環として、グローバル全体で“Skills to Succeed(スキルによる発展)”というテーマのもと、人材スキルに係る課題解決を中心に活動を推進している。社員の「時間とスキル」を提供する「プロボノプロジェクト」もそのひとつ。中でも「人材ダイバーシティの促進」をテーマに、自社単体だけでなく、日本財団パラスポーツサポートセンターのパラアスリート、パラスポーツ指導者の講演講師派遣プログラム「あすチャレ!メッセンジャー」を支援するなど、共同での支援活動にも力を入れている。



アクセントゥア株式会社



体験会・講習会



ボランティア

企業情報

アクセントゥア株式会社

【住所】東京都港区赤坂1-8-1

赤坂インターシティAIR

【電話】03-3588-3000(代表)

【URL】<https://www.accenture.com/jp-ja/about/corporate-citizenship/skills-succeed>



もっとパラスポーツの素晴らしさを広めるために

アクセントゥアがここで取り組んでいるのは、パラアスリート、パラスポーツ指導者を講演の講師として派遣するプログラム「あすチャレ!メッセンジャー」の運営と実施サポート。パラアスリートの自己発信能力向上を目的に、スピーチのトレーニングを行っている。

取り組みのきっかけについて、「もっとパラスポーツの素晴らしさを広めたい、熱狂や感動を伝えたいと思いました」と、同社ビジネスコンサルティング本部 マネジング・ディレクターの中村健太郎氏は語る。

「感動の中心にいるのはパラアスリートで、そこには逆境を打ち破ってメダリストになるという物語があります。しかし、感動を生み出すパラアスリート自身に収益として還元されていないという問題意識もありました。この課題解決に、アクセントゥアの力で貢献できるのではないかと考えたのです。」(中村氏)



中村 マネジング・ディレクター

パラアスリートの物語をより感動的に伝えられるよう育成

そうして取り組んだのが、メッセンジャーの育成と実施サポート。具体的に行うことは、よりよい講演を実現するスピーチの力を鍛えるトレーニングだ。パラアスリートとしての生き様にはドラマがあり、それ自体が非常に強いコンテンツといえるもの。しかし、伝え方によっては興味を惹かない内容になってしまうと中村氏は語る。



トレーニングの様子

「私がパラアスリートの方と会話する中で、勉強になる話や感動的なストーリーに共感することは何度もあります。しかし同じ方が同じような内容を講演で話すと、その面白さが伝わらないということもよくあるのです。そこをトレーニングによって、スキルアップしていくのです。」(中村氏)

スピーチの構成を組み立て直し、より面白くなるよう工夫した

これまで育成プログラムで苦労した点は、ある一定のスキルまで上達すると、アクセントゥアの担当者がコーチをしても、講演が面白くないことだったと中村氏は振り返る。



講演するパラアスリート

「パラアスリートの物語はコンテンツ自体が強いですし、ビジネスでよくある新しい概念や仕組みのように難しい話ではありません。そのため、結論からではなく時系列に従ってストレートに話したほうがよかったです。これは我々がビジネスで行っているプレゼンテーションにも大きな学びになりましたね。」(中村氏)

聴講者からは「心の持ちようが変わりました」、「将来に

対する不安がすっきりしました」、「メンタルのコントロールやトレーニングの参考になりました」など、大きな反響の声が届いているという。

精神・知的・発達分野のパラスポーツにも光を当てたい

「パラスポーツに今後期待することは、彼ら自身の肉体的、精神的な強さを知らしめることでスポーツの観客や講演の聴講者に勇気を与えること。その意味でも、いっそうパラスポーツの価値や魅力を伝えていきたいです。」(中村氏)



リモート講演にも精力的に取り組んでいる

育成プログラムの取り組みは「あすチャレ!メッセンジャー」事務局に移管しつつあるとはいえ、これからもパラスポーツ振興のために力を尽くしたいと言う中村氏。そのうえで着目しているのは、対象となるパラアスリートの幅を広げること。身体的な障がいだけでなく、精神・知的・発達に障がいのある人のためのスポーツにも光を当てていきたいとビジョンを語る。

今後の取組について

アクセントゥアとしては支援対象の拡大を目指しつつ、「あすチャレ!メッセンジャー」の運営をサステナブルにするために、自社だけで活動を仕切るのではなく、過去に作成した動画をコンテンツ化したり、講演スキルの高いアスリートに講師を託したりと、育成プログラムに関する役割を事務局側へ少しずつ移管し、事務局だけで運営できるように支援していく。